

砥部焼産地としての砥部町の研究

西 龜 正 夫

砥部町概観

砥部町は松山市の南方約十二軒の地點にあつて、砥部川流域の大部を占むる人口約四千五百の一山村である。その名稱からしても古くから砥石の産地であつたことは想像される處で、東隣坂本村には砥石場といふ地名があり、又現に町内外山トヤマからは砥石を産出してゐる。

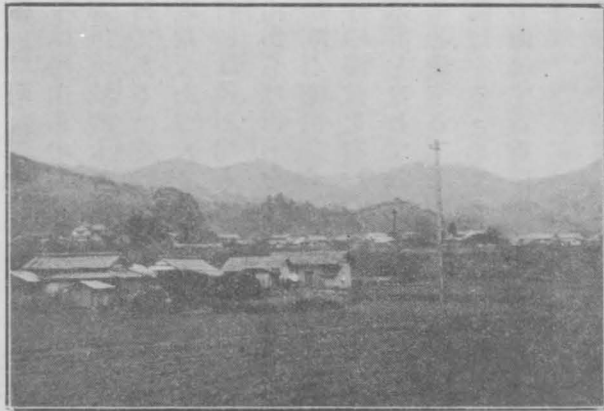
南方には石槌山から續く一脈の連山があつて千米内外の海拔を有し、以て瀬戸内海と太平洋との分水界をなしてゐる。砥部川はこの連山に發源して北流する。この川は久谷川・林川・井内川等と並行するコンセクエントの川で、これ等を集めて西流する重信川はサブセクエントの川である。

町は地形及び地質上南北の二部に大別するこ

とが出来来る。南部は概ね海拔四百米以上の山地で、砥部川の本支流はその間に狭いV字谷を穿つて流れ、谷壁は時として四五百米の急斜面を以て峙ち、谷底には殆ど平地を見ないが、北部は全くこれに反して海拔三百米以下の丘陵ばかりで、砥部川はその間に稍廣い谷を開き、河岸には數段のテレスが出來て居住及び農耕に都合のよい地形を呈してゐる。

之は南北地質を異にするからであつて、南部は石炭紀層の綠泥片岩の上に中新層の礫岩や砂岩・頁岩・凝灰岩等を載せ、所々に安山岩の噴出を見るが、北部は上部白堊紀の砂岩及頁岩を主とし、河畔には洪積層の粘土及礫層を見るのであつて兩部の境界は岩谷・野寺・外山を通ずる一大斷層線によつて明瞭に區分せられるのである

第一圖



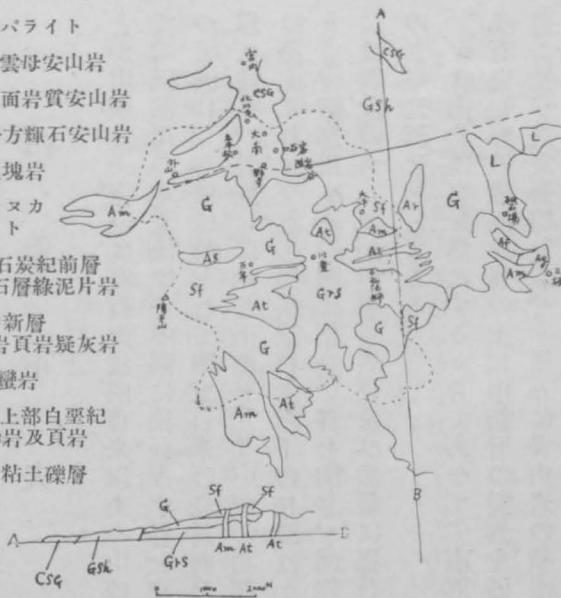
段丘上の聚落

(大南の東方より岩谷口を望む)

聚落も亦地形の支配を受けて南北著しい相違を呈する。北部は大南の街村を始めとして何れも河畔の段丘上及び谷底の低地に立地し、家屋の密度も亦概して大であるが、南部は概ね河岸

を離れた谷壁上の緩斜面、所謂山肩の部に存在し、何れも數戸乃至數十戸の小聚落である。今第二圖 砥部附近地質略圖

- L リバライト
- Am 黒雲母安山岩
- At 粗面岩質安山岩
- Ar 斜方輝石安山岩
- Ag 集塊岩
- As サヌカイト
- Grs 石炭紀前層
出石層緑泥片岩
- Sf 中新層
砂岩頁岩疑灰岩
- G 全變岩
- Gsh 上部白堊紀
砂岩及頁岩
- CsG 粘土礫層



その主要聚落の高度を見るに、

大平	四〇〇米	フタタギ	三二〇米
峰大平	五二〇米	千里	四五〇米
弘法師	四二〇米	十郎	四五〇米
宮ナル	四〇〇米	北萬年	三〇〇米
瀧川	五二〇米	南萬年	二六〇米
立野	四六〇米	黒岩	三二〇米

これに對する北部の諸聚落は何れも高度百米以下である。尤南部にあつても河畔の聚落として小名(一一〇米)深田(全)堂成(一二〇米)ヨケ(全)宮ノ瀬(一六〇米)千里口(一八〇米)等があるが、峽谷の底であるため太陽は十時半に出るが、二時半には没するといふ有様で、日照不充分のために農業も極めて困難な小聚落に過ぎない。町の中心部は大南であつて砥部川本流左岸の段丘上に位置し、長さ約八百米に續く街村をなし、その附近には千足(原町村)北川毛・五本松・長世寺・岩谷口等の散村があり、水田も多く、丘陵の斜面は果樹園となり、又砥部焼窯も所々にあつて町の經濟的重心點をなしてゐる。

砥部焼産地としての砥部町の研究

砥部町は近年町制が施行せられたが、景觀上から云へば村落であつて村と稱する方が適切である。街村の大南と雖も商店は極めて少く、一見して市街といふ感じは起らない。實際その商圏も亦殆ど他町村には及んで居ない有様である。

町民の生活を維持するものは主として農業であるが、耕地が狭いので到底それのみでは不十分である。たゞ砥部焼は唯一の工業品として、不況の今日と雖も尙重要な經濟的意義を有する。

砥部焼の起原及沿革

砥部焼の歴史を詳記することは本稿の目的でないから極めて簡単に記すこととする。砥部焼は安永四年大洲藩主加藤侯の保護奨励によつて始まつたもので、最初は外山産の砥石の屑を利用したものであるが、安永六年には磁器の焼成に成功し、(杉野丈助・門田金治)文政元年川登石の發見によつて大に改良せられ(向井源治)全

八年には伊萬里様の上繪付が始まり、明治十一年に染付及び型紙繪付・京都風繪付等が創められ(伊藤光讓)明治十八年に始めて海外輸出が行はれた。その後明治廿三年に向井和平によつて淡黄磁が製作せられて、所謂砥部焼の特質を發揮するに至つた。

併し淡黄磁は高價であるため一般大衆向で無く、随つてその需要も盛でないが、日用品及び輸出向の食器は非常に廉價であるため需要が多く、世界大戦當時の好況に乗じて大に發展したが、最近は不況のため休業相次ぐの状況である。

教育機關として大正四年に砥部工業徒弟學校が設立せられ、全八年には工業學校に昇格したが、昭和四年廢校して縣立工業試驗場の分場となり、昭和七年からは縣の手を離れて同業組合經營の下に各種の試験を行ひ、以て當業者の指導開發に任じてゐる。

原 料

砥部焼の原料土は三坂より障子山に至る一帯の地、及び明神山北方等に存在する黒雲母安山岩又は粗面岩質安山岩が、温泉作用及び風化によつて變質したものであつて、地表に近い部分は良質であつても、少し掘り進んで分解度の低い部分に達すると品質不良となり、又硫化鐵を含まないものは焼き上げると黒胡麻が出来るのでいけない。そこで掘つてから暫く積み重ねて風雨に曝し、硫化鐵が酸化して水酸化鐵となり淡褐色を呈するに至つて始めて原料に供することがある。最初に發見されたのは川登石で、弘法師石の如きは最も良質と稱せられたが、現今使用してゐるのは主に萬年石と川登石とである。これまで使用された原料を列擧すると、

砥部町産

萬年石 (粗面岩質安山岩) 淡黄磁の良品用

川登石 (全) 下等品用

弘法師石 (全)

南山崎村産

鶴ノ崎石 (粗面岩質安山岩)

兩澤石 (黒雲母安山岩)

上唐川石 (全)

佐永谷村産

阿別當石 (黒雲母安山岩)

廣田村産

玉谷石

坂本村産

三坂石

以上は素地用であるが、釉薬用としては上灘の高野川石、北山崎村の三秋石、南山崎村の大平石、小大下島及び上浮穴郡野尻に産する石灰石、大三島産の長石及び温泉郡小野村産の楢灰が用ひられ、縣外からは對州石や柞灰等も輸入される。又窯内部の設備に用ひられる所謂道具土(耐火材料)は、北川毛・五本松・宮内・大角藏等から産する粘土を用ひ、又備前三石産の蠟石、伊賀の木節、硅砂末等をも使用する。尙彩畫の材料は支那産のゴスが主に用ひられる。

砥部燒産地としての砥部町の研究

燃料及び動力

燃料は主として附近山地に自生する赤松材を用ひ、樹齡二十五年乃至三十年位のものが最もよいと云はれてゐる。石炭に比較すると熱量は三分の一であるが、價格は四分の一であるから石炭よりも有利であるといふ。蓋し九州方面の石炭を取寄せるとすれば、海岸から離れてゐるために運賃が嵩むからである。現今町内の産のみでは不足するので、坂本村・拜志村等からも移入せられ、又荏原村中野附近の重信川沿岸の砂原にある松林からも取寄せたことがある。

原料石粉碎のためには水車が用ひられる。始めは僧都ソウツ又はサコンタンと名づくる天秤の形をした原始的の春を用ひてゐたが、岩谷口窯の多藏なるもの唐津の水車を見學して歸り、今日の如き水車式に改めたものである。

水車房の分布を見ると、砥部川上流川登からヨケ附近に最も多い。これ一には急流であり、水量が多いにもよるが、又一面には川登が多量

の原料石(川登石・萬年石)を有するからである。その製品は一時三島方面へも供給したことがある。明治二十七年には水車數二十三、臼數二〇九あつて、多くは製陶家の自家用であつた

第三圖



岩谷口の水車房

右端は堰を越えて流れ落つる水、左端は原石置場、水車はその左方にあるが寫つて居ない。

が、獨立營業も五六名あつた。一分間の落杵數は平均三〇、一杵の重量は十貫、臼と杵との距離は一尺を普通とする。

五本松方面にも嘗て水車房のあつた跡はあるが、川が小さく水量も少いので早く廢絶したらしい。岩谷口方面にも休業中のもの及び廢址がある。このあたりも流れは比較的急であるから、僅かの水路を作ればすぐに適當な落差を得られること寫真に見られる通りである。

工場

現今工場は砥部町内に大工場五、小工場六あるのみで、町外では郡中に二工場ある。併し明治廿七年頃の調では本窯二十(室數百七十二)素燒窯三十二、飾窯五であつたとのことで、大正五年には砥部町外四町村に亘つて一會社十九戸の工場があつた。即ち、

砥部町五本松	二	小家ヶ谷	一
大南	二	大谷	二
岩谷口	一	北川登深田	二
原町村	二		

で、それからの二三年間が全盛時代であつたが、大正十年頃から次第に不景氣となつて今日に至つた。

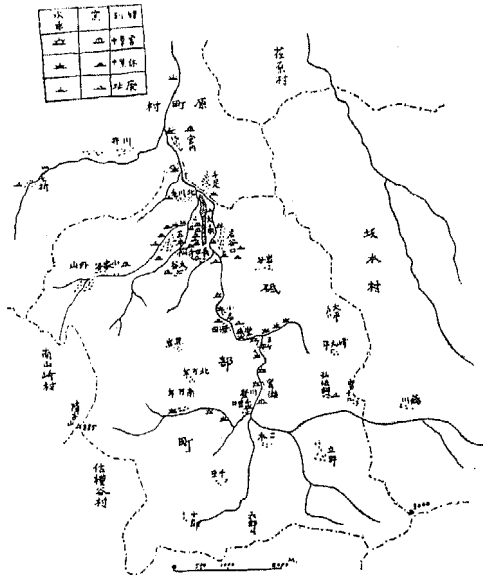
窯は凡て登窯式であつて一間に付二寸乃至二寸五分の傾斜を有する。随つてその築造には傾斜地を必要とするから、凡て山麓若くは段丘崖を利用してゐる。

最初に出来た窯は五本松にある向井窯であるが現在は休業中である。古い窯には山麓方面にあるものが多いが、現在残つてゐるのは概ね大南の街村に近いものばかりで、大窯としては下梅野窯・龜井窯・工藤窯(以上何れも大南西方の段丘崖)及び上梅野窯(大谷の山麓)の四工場である。

古い窯跡には川の上流方面に位置するものもある。併し概して聚落に近い所に立地するものが多いのは、職工の居住や製品の搬出等種々の

低部焼産地としての低部町の研究

便利があるからであらう。異例としては弘法師の窯で、海拔四二〇米の山肩の部にある。これは優良な原料を産するためその原料産地に築造したものであるが、交通不便のために經營困難



第四圖 工場及水車房分布圖

に陥り、五年間に工場主が三代も交つて遂に廢絶した。出来たのは今から五十年前のことで、當時已にその無謀を嗤つたものがあつたとのこと

とである。

勞力

現今原料石採掘人夫約二〇人、これを水車場に運ぶには多くネコ車又はナダ車と稱する一輪車を用ひ、その人夫約二〇人、石粉及び製品を運搬する馬車十臺、工場に於ける陶工その他約一〇〇人、燃料木材の伐採搬出に従事するもの亦一〇〇人以上であるといふ。明治廿七年の調によると工場労働者は次の通りであつた。

職工 三五七人

内 陶器工 二三一

陶器工(男) 一〇

同(女) 一一六

雜役夫 七二八人

内 土漕人 三六

手傳人 二〇〇(男) 一〇〇(女)

建築師 五

陶器撰師 一八

窯焚き 三二

荷造人夫 二〇

製品

燒道具師 三〇
下男 三〇

砥部燒の代表的なものは淡黄磁で、クリーム色を呈し、模様を彫刻した無彩色のもので極めて優雅である。瓶子や花瓶などの様な裝飾的家具を主とし、稀に庭園に配置する鶴の様なものも製するが販路は極めて狭い。その落付いたクリーム色は原料に特有のもので、他地方のよく真似能はざる所であるが、稍低溫で焼き上げるので酸化鐵のため透明性を缺き、熱度の少異によつて色調が異なるので同一の品を多數揃へることが極めて困難で、ために高價となるから一般大衆には需要されず、隨つて産額も極めて少いのである。

現在砥部燒の大部を占むるものは日用飲食器の繪付磁器で、全産額の九割を産する。中でも南洋土人向の茶碗が最も多いが、品質粗悪で只價の廉なるをのみ特長としてゐる。即ち茶碗八



第五圖 砥部焼淡黄磁

二百個入壹箱目下十二三圓といふ相場である。
 全産額は明治十年に四萬一千圓、十四年に十萬圓、十五年に十萬三千圓となつたが、その後漸減して十九年に四萬六千圓、次で六萬圓臺に上り二十八年に至つて十萬圓を突破し、四十三年には二十萬圓、大正二年には二十四萬圓、大正七八年頃の好況時代には一躍して百十萬圓まで上つたが、その後又減じて昭和六年には二十八萬圓となつてゐる。その中輸出向約二十萬圓で他は内地向である。

販 賣

砥部焼は早くから松前町マツマエの行商人によつて全國に賣り廣められた。松前商人は小帆船を利用して伊豫絣と共にこれを各地へ賣り歩いたもので、四國・中國の沿岸は勿論、九州・山陰から遠くは北海道までも及んだ。この特異な陶器行商は凡そ三百年前に起原をもつもので、海岸を離れた砥部焼産地から、最も近距離にある港として松前町がその積出の任にあつたもので

ある。行商船は明治十五年に四十艘、四十五年頃は五十艘もあつて、砥部焼の過半を取引してゐた。

併し砥部焼は一般大衆向でないために、瀬戸焼や有田焼に壓倒せられる様になつた。そのため松前商人はこれ等他地方の陶器を行商する様になつて、砥部との關係は漸次薄らいで行つた。

一方砥部焼は輸出方面に發展する様になつた。明治十八年の頃阪神地方に居た砥部焼仲買人が清國人との取引を開いたのが始めて、三十九年には神戸の貿易商と計つて東洋各地への直輸出を始め、北は沿海州から南は南洋各地に及んだ。

現在は南洋方面を主とし、トラックで郡中に出し、それから汽船で神戸に送つてゐる。

砥部町の經濟と砥部焼

砥部町の經濟狀態は決して良好と云はれない。元來山間の溪谷に僅かの耕地を求めて、砥

石及び焼物の産出によつてその生活を維持して來たものであり、砥部焼の盛であつた時代には煙のために障子が黒くなると云つた位であつたから、不況の今日その經濟生活が苦しくなつたのも已むを得ないことである。即ち土地の生産力は充分にその人口を支持することが出来ないで、人口の増加極めて僅少、否多くの部落に於ては減少が著しいのである。

大正十四年(國調) 昭和五年(國調)

高地部落		低地部落	
大南	一二六九	大南	一七三二
岩谷口	四七二	岩谷口	四八三
五本松	三九五	五本松	三一七
北川毛	三五四	北川毛	三三〇
大平	一九七	大平	一七五
川登	一一六三	川登	一〇二二
萬年	二七一	萬年	二二五
外山	四〇七	外山	三九四
計	四五二八	計	四六七八

而してこれは決して人口の自然増加の少ないめで無いことは、昭和六年の出生率五二・一、死亡率一九・一であることから證明せられる。即

ち我が國到る處の農山村に見られる「向都離村現象」なのである。

町民の出稼先については詳細な統計を缺くが、概ね京阪地方、松山市、滿洲及び北海道等に出て行くもので、多くは壯者の單獨出稼で全戸移住は少い。就中松山市に向つては下水掃除の如き下級労働者として出るものが多いが、都會のルンペンとは違つて正直で眞面目だといふので需要が多いとのことである。

砥部焼の全盛時代には、年に百萬圓といふ大金が町内へ落ちたのであるから、料理屋や飲食店の繁昌も素晴らしいもので、數十人の藝者も毎夜箱切れといふ有様、鼓歌の聲は谷に衍して山間の一大歡樂境となつて居たのであるが、今では料理屋二、旅館二、飲食店一〇、藝者も五人に過ぎないし、その飲食店もトラックが馬車に代つてからは寂れるばかりである。

そこで農家は多角形式の經營にうつり、丘陵地を拓いて果樹の栽培を始め、養蠶及び煙草栽

培等にも努力するに至つた。米と麥とは辛うじて自給し得るに過ぎないが、換金作物は相當の高に上つてゐる。昭和六年の統計によると、

柑橘(蜜柑)	一六、八〇二圓
同(ネーブル)	六、八六〇
同(その他)	六五八
梨	二三、一〇四
煙草	四、三七四
春蠶	六、二三一
夏秋蠶	五、五二三

等がその主なるものである。併しこれに對しては金肥の輸入約三萬五千圓に及んでゐるから、差引純収入は三萬圓足らずとなる。

ところで町民の生活必需品として他から輸入せられるものは、呉服類だけでも二萬圓以上と見積られてゐるから、その他の日用品等も恐らく數萬圓に上るであらうし、たとひ出稼者からの送金があるにしても、一方には學資金などの仕送りもあるから、これだけではどうしても數萬圓乃至十數萬圓の缺損になるであらう。砥石

の如きも僅々六千圓の産出に過ぎない。

然るに砥部焼は年二十八萬圓を生産してゐる。而してその原料も燃料も勞力も殆ど凡てが町内自給である。今砥部焼生産費の構成を見ると、

原料代(坯土代・繪具代・釉藥代)	三五・九〇%
燃料	二六・三〇%
勞力費(成形費・繪付費・窯詰・窯たき・窯出し費・撰別・荷造費)	二四・一七%
工場費(雜品代・雜費・修繕費・道具組立費)	六・三〇%
純益	七・三一%

而してこの中他から輸入せられる原料及び燃料の一部を差引くと、町内自給の割合は約七六%となるから、年産二十八萬圓とすれば二十一萬餘圓は完全に町内を潤す勘定となる。して見るとこれは農産物などとは桁違ひの大生産である。

今日の砥部町が砥部焼に依頼することの大なるはこれを見てもわかる。従つて將來町勢の發展には、どうしても砥部焼を度外視することは

出來ないのである。

町 是

砥部町の將來のために計るに、農業の方面にもまだ餘地は多い。果物にしても適地はまだ澤山あるし、販路を海外に開拓することを心掛ければ随分有望なものがあらう。併しそれよりも一層重點を置くべきは砥部焼であらねばならぬ。

原料は豊富であり水力も充分、薪材は廉價であるし工賃も安く、熟練職工にも事は缺かないのであるから、たゞ販路の擴張を計ればよいことになる。砥部焼は價格の低廉を特色とするが、質が粗悪なため肥前ものなどのために壓迫されつゝあるから、第一にもつと優良な原料石を發見するにつとめ、若くは鐵分を除去する何等かの方法を工夫し、第二には技巧を改良し、型を用ひて整一な品を手輕に作る方法を考案し、第三には現に試験場に於て試作してゐる様な色物などの方面にも進出すべく、第四に上り

窯は熱度不平均のため整一な品が出来ないから倒焰式角形窯等を用ひることも研究すべく、尙製品の形や模様についてはもつと海外需要地の好尚を研究してかゝらねばなるまい。

加之最も改良すべき點は生産及販賣の統制である。現在では業者各個が思ひ／＼にやつて居て、原料石採掘者と各工場とは各個に自由に契約してやつてゐるし、燃料も同様の不統一さであり、販賣も亦各個にやつてゐるので運送費その他にも損することが多い。將來事業の合同か又は原料・燃料から生産販賣に至るまでを強固な組合組織によつて統制すべきであらう。

それと同時に山林の荒廢が著しいから、林制に向つて大に注意を拂はなければならぬ。今日のまゝで推移したらやがて燃料缺乏に苦むことは明かで、その時石炭に轉換するには位置の關

係上有利でないから、海岸に近い郡中町方面のために砥部焼のお株を奪はれるに至るであらう今日交通不便なこの地にこの工業の持續してゐるのは、一は傳統の結果であり一は薪材の安價なためであるから、林制整備は何よりも焦眉の急務であると思ふ。

本稿を草するにあつて愛媛縣郷土地理研究會の大里・野間・日野三君、砥部試験場小野氏、砥部町長玉井氏、その他關係各方面の人士の御好意と御助力とを多謝す。尙主要參考文獻左の如し。

伊達幸太郎 砥部磁器業誌(寫本)明治廿八年

同 砥部燒改良論(寫本)明治卅二年

金島茂太 砥部燒(大日本實業會雜誌二八一、二八二號)大

正五年

大里・野間・福樹 松前町の陶器行商に就て(郷土の地理三號)

昭和七年